

## 「吉野図屏風」の景観描写に関する一試論 ―〈桜〉に〈滝〉〈谷川〉〈岩〉の図像学―

井戸 美里(京都工芸繊維大学)

吉野の桜を絵画化した作品としてまず想起されるのは、豊臣秀吉が文禄三年(一五九四)に行った吉野の花見に取材した「吉野花見図屏風」のような風俗画作品であろう。一方で、そのような風俗画的な要素を一切排し、山辺一面に咲き誇る山桜が風に吹かれては散る幻想的な景観を描く一連の作例が現存している。現在、サントリー美術館、ウェーバー・コレクション、春日大社に所蔵される「吉野図屏風」の三作品は、先行研究によって構図やモチーフに共通性が見られることが指摘されている。山根有三氏は、元和六年(一六二〇)の醍醐寺三宝院の義演による『義演准后日記』のなかに「桜花<sup>白</sup>数本盛の躰也、滝、谷川、岩」を描く「吉野金屏風」の存在を指摘し、御所に所蔵されていた「古土佐筆」の屏風を写させて新たな作品が制作されたことを示している。泉万里氏は、吉野を描く屏風が、「競馬図」とともに、春日社においては中世から江戸時代にかけて伝統的に描き続けられた画題であったこと、春日社に少なくとも三点の「吉野図」がかつて存在したことを指摘している。本発表では、このように、ある一定の図像が共有され、継承されていく一連の「吉野図屏風」について、日本国外で確認することができた三つの新出の「吉野図屏風」を加えることで、このようなモチーフの継承について考察することが本発表の目的である。

まず、現存中最も古いとされるサントリー美術館蔵の作品を基準として、新出の三点を加えた計六本の「吉野図屏風」における構図やモチーフの分析を行い、それぞれの引用関係や成立時期について確認を行う。さらに、「吉野図屏風」については、昨年迫村知子氏によって和歌との関わりから詳細な研究成果が報告されたが、〈桜〉とともに描かれる〈滝〉〈谷川〉〈岩〉は、和歌に詠まれた情景であり、古くから天皇が行幸した「宮瀧」を想起させる伝統的な図像であったことを指摘したい。最後に、このような伝統的なモチーフによって構成される「吉野図屏風」が描き続けられてきた受容の場や歴史的背景に光を当てる。上述の『義演准后日記』は「吉野図屏風」がかつて御所に所蔵されていたことを示しているが、一方で、春日社や醍醐寺においても制作されたことが明らかであり、古くから吉野山や金峯山寺とそれぞれ深い関わりをもっていた。十六世紀末から十七世紀初頭の「吉野図屏風」が少なからず存在する背景には、天正十四年(一五八六)の火災によって焼失した金峯山寺の蔵王堂が再建されたことがあったと思われる。春日社に屏風一雙が届けられたのは、天正二十年(一五九二)、蔵王堂が落成した年のことであった。また、十七世紀初頭に醍醐寺において御所本をもとに制作された新たな屏風については、吉野が復興を遂げるなか、義演が金峯山寺を拠点とする修験道の当山派の棟梁として吉野との関係を再構築する過程において所望した作品であったと解釈したい。